

クウェートの仕事の思い出

R2.1.14 林 興一郎

クウェートでの仕事のエピソードを紹介します。今から30年前、私は三菱重工でクウェート向け、30万キロワット、8ユニット、計240万キロワットの火力発電プラントの担当をしていました。受注総額1800億円、コスト2000億円の工事です。大目標は赤字200億円をゼロにすることです。火力発電プラントを構成する機器の内、自ら製作するボイラ、蒸気タービンのコストは全体の3分の1、残り3分の2は外部からの購入品です。ボイラの純水装置、薬液注入装置、送風機、ポンプ等、タービン室の天井クレーン、エレベータ、海水のごみを除去するスクリーン装置、各種電気設備など、全て購入します。従って、赤字を減らすには、これらの装置を如何に安く調達するかが鍵です。プラントの契約はドルですから、円高ドル安になるほど、受け取る円が目減りします。この影響を避けるには、ドルで物を購入する、即ち、海外調達がポイントです。私は、通算、11回クウェートに通いましたが、大半は、海外メーカの製品を認めて貰うことです。日本にプラントを発注したのに、何故、品質の良い日本製を使わないかと問われましたが、納期や納入実績で、ヨーロッパのメーカが優れていると説得しました。

さて、一般にボイラ本体は契約者自身の責任に任せてくれるのですが、クウェート電力庁からは、ボイラ製作に使う素材まで、承認対象にするという驚くことを言って来ました。その中に、ボイラの火炉壁を構成するためのボイラチューブという、直径数10mmの細管があります。工場には、日本の一流メーカである日本鋼管のボイラチューブが山積していました。この細管を並べて溶接して板状にして、火炉壁を作ります。さて、突然、クウェート電力庁から、日本鋼管製を認めないと通知して来たのです。驚き、困りました。工場の工程がストップします。急遽、クウェートに出向きました。彼らの言い分は、日本鋼管に罰を与えねばならんというのです。

事情を調べると、実は、この発電所の前に、東芝が納めたタービンの工事で、東芝が日本鋼管に発注した再熱蒸気管に製作ミスがありました。再熱蒸気管は直径数10cmの大口径配管で、作り方は板を半円形に曲げて、2枚を突き合わせて、長さ方向に溶接して、丸い配管にします。何かの理由で、この配管を途中で切る必要があったらしく、その時、切った断面が、完全な円形ではなく、真円度がアメリカの規格ASMEから外れていたため、クウェートを怒らせたようです。東芝は何か所も配管を切らされ、真円度不足で、結局、全部の再熱蒸気管を再製作させられたそうです。クウェート電力庁としては、ASME規格に反するような配管を作る日本鋼管は許せないということで、わが社のボイラのボイラチューブに日本鋼管製は認めないと言ってきたのです。とんだ、とぼっちりです。こちらは、工場に山積している日本鋼管製を使うしかありません。ボイラチューブは製造方法が引抜き鋼管で、溶接して作るものではなく、真円度は問題にならないと反論しましたが、彼らは、善悪の観念しかなく、技術論争では勝てないと分かりました。

作戦を変えました。納期です。彼らは、日本鋼管以外のメーカーに変えればよいと思っています。そこで、他の一流メーカーから断り状を取ることを考えました。時は、お盆、日本は会社が休みですが、長崎の工場に資材部門の人を出社させ、急遽、新日鉄、フランスのバロレック、イギリスの某メーカーなどと交渉させ、何とか断り状を入手しました。普通は断り状なんか出さないものです。

それを現地にいる我々にファクスして貰い、クウェート電力庁に「この通り、世界の著名なメーカーは納期が間に合わないと言っている」と手紙を見せました。

彼らの反応は、メーカーは仕事が欲しいはずだ、不思議だという顔付きでしたが、それ以上追及する能力もなく、しぶしぶ、日本鋼管を OK してくれました。通常の技術打ち合わせでは、クウェート電力庁に雇われたエジプト人エンジニアが応対してくれますが、この罰云々の問題では、頭にかぶり物をした、クウェート人の高官が返答しました。かくして、日本鋼管が承認されましたが、同行して貰った日本鋼管の技術部長も、海外出張が初めてで、しかもこんな議論になるとは、思わなかったと驚いていました。長崎で、盆休み中、メーカーと交渉してくれた担当者とは、以後、戦友だと肩をたたき合ったものです。

クウェート国はペルシャ湾の奥にある小国ですが、石油に浮かぶ国といわれる金持ちの国です。クウェート空港にはいつも、夜、到着しましたが、空港は光の海で、いかにも石油を潤沢に電力に使っているのが分かります。そとに出ると、砂漠特有の鼻にツンとくる、気持ちの引き締まるような臭いがします。今回も頑張っ、コストダウンして帰るぞとファイトが沸き起こったものです。

イラクがクウェートに攻め込んだのは、それから数カ月後です。クウェート国がなくなり、工事は中断。アメリカが湾岸戦争でクウェートを解放し、工事も再開、無事完成しました。